

---

# 守護する者

不乱剣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

守護する者

### 【Zコード】

Z6308C

### 【作者名】

不乱剣

### 【あらすじ】

こことの世界とは別の『世界』の話。ある国では、妖精狩りが行われた。不運にも標的にされてしまった少女、『狩る方が悪い』と言つて妖精に味方するハテナな青年の物語

「ハア、ハア、ハア」

少女が走る。

ザアザアと降りつける雨が少女の体力を奪う。

追われているのだ。

追っ手は4人、皆腕利きの傭兵と見える。

少女の追われる理由は外見にあった。

長いストレートの白髪もそれなり目立つのだがもつと異常なところがある。

銀色の眼、尖った耳、少女は精霊族だ。

精霊族は魔術使える高等な種族だが、人間とはあまり仲が良く無い

自分達と違う」とで忌み嫌っているのだ

少女の体力も限界に近づいてきた。

止まつて息を整える。

前方の方から微かな気配がした。

顔を上げるとスミレ色の眼光が自分を捕捉していた。  
ほんの少しの気配だったのだが前方1・2メートルほど前に警戒すべき存在があった。

「おい、そこガキ！お前も同業者か？言つておくが俺たちが先に見つけた獲物だぞ」

追つてきた男達のリーダー各の男が声を張り上げる。

「あんたはこいつをねらつていいのか？」

えらく低いトーンで喋る眼前の青年だが自分にはどうでもこいつに感じられた。

「そうだ、言つまでも無いだろ！」

「わかった」

単純な回答

その瞬間眼前の男は消えた。

といつよつ早すぎて自分の肉眼では捕らえられなかつたのだ

少女はすぐ振り返り男達を見る。

神速の青年が全員に打撃を与え吹き飛ばした。

「帰れ」

その声には殺氣が籠っていた。

「…？」

「こいつら、やつてしまえ…！」

蹴り飛ばされた男の仲間は何が起こったのかわからなかつた。

抜剣し全員で襲い掛かつた

青年は鞘の付いた剣を振りはらつた。

鎧が割れ、剣が折れる。全員吹つ飛ばされた。

「ゲホッ、ゲホッ、グウッ、な、何故だ？」

「俺の剣は特別製でな、白金でできていんだよ。重さは他の剣と比べ物にならないぜ」

「あ、ありえねえ……そんな重いもの……簡単に振り回すなんて…」

「…」

「実際やつているんだ」

「…………」

「おこ、逃げろよ。そつしないとかッコが付かないだろ？」

急にフランクな発言をする青年  
男達は無言で去つていった

最後まで見えなくなつたのを確認すると近づいてくる

後ずわりして逃げる体制に入る。が。

「あーあー、お嬢さん逃げてどうするわけ?帰れるの?」

ハツと氣付いた。ここまできて水の神殿に帰れるとは思えない。

「ヤツパリ、帰れないじゃん。そこで提案がある。家に泊まつていかないか?」

不敵な笑みと白い歯を見せつけられ1秒後にこりひた背を向け歩き出した。

それからどうすればいいかも分からずに黙つて付いていった。

\* \* \*

キイイイイイイイ

古い木製のドアを開ける

中には質素な家具がいくつあるだけだ

連れてきた少女おじおどと家にはいるやきよみやと家のなかを観察する。

「名前、なんていの？」

「アルティナ……、アルティナ・ウイッチ・フォールタル」

「せうか俺はレイオ、よろしくな、アルティナ」

互いの紹介が終わつたらアルティナはまじめな顔をして質問した

「…………何で助けてくれたの？」

「誰かが妖精を嫌つて刺客をさしむけたんだろう？だつたらあつちが悪いじやん追い返したほうがいいじやん」

硬い表情のアルティナとは対照的に軽い口調で答えるレイオにアルティナは首をかしげる

「変だよ、あなたは人間と妖精を同じ扱いしてゐる」

「変とは何だ！でもお前の気持ちもすこしは分かる、人間と妖精は違うところはたくさんあって区別するべきかもしれない。だけど意思のある生物の行動はみんな同じ基準にあると思う。だからこうゆうことは公平に見るべきじゃないかな？」

アルティナはレイオを自分の仲間だと判断できた。自分を明かし接してくれる。自分もそうしなくてはいけないと思つた。

「あなたは……」

「おー」

「はい？」

「アルティナ名前で呼べよな『レイオ』ってな

「分かつたよ、レイオ」

青緑の長髪が揺れる。

生い茂る木々と会話しながら微笑みをもらす。  
十八ほどの青年は胸を彈ませ今にも歌いだしそうだった。

木々が告げてくれる。すぐ其処だと  
現れたのはボロボロの小屋

見つけたと同時に小走りで駆け寄る。

扉の前に立ちノックする

「馬鹿弟か」

「やめてよ、その呼び方」

「ヤイバ…」

扉が開かれた

天使的な笑みを浮かべ

「やあ、兄さん」

\* \* \*

レイオは気配に気付いた。

「こいつは……」

扉がノックされた。

「馬鹿弟か」

「やめてよ、その呼び方」

「ヤイバ……」

扉をあける。

「やあ、兄さん」

「今何時だと思ってやがる」

「あ、ゴメン、早かつた？」

「今は4時だ。まあいい中に入れ」

それからいろいろと話を聞いた。

旧友の事、世界の状況などいろいろ話を聞いた。

「兄さん知ってるかい？この領の国が兵を動員したんだって」

「何のために？」

待っていましたとばかりに顔を近づける

「それがね、この森にいる妖精を一掃ためだつてさ」

「それは……なんと言つか……タイミングが悪いな」

「なんで？」

そのとき最悪タイミングでドアが開いた。

彼女は眼をこすり

「ムニュムニュ……誰？その人？」

ヤイバは呆然としてアルティナを見つめる

「アルティナ、紹介するよ。こちらはヤイバ、俺の弟分だ」

「ヤイバ、紹介する」こつはアルティナ、昨日拾った猫だ

「…………！？やばくない？」

「とてつもなくやばい」

「ねえ、何の話？？」

アルティナの頭に疑問符がついている

「仕方がない……」

ため息をつき話始める。

\*

\*

\*

「ふーん」

「落ち着いてるね」

「大丈夫だもん、この前レイオが私の味方だつていったから絶対大丈夫、それにヤイバさんも手伝ってくれるんでしょう?」

横をちらりと見てみたヤイバが変な表情でこっちを見ていた自分をこんな表情をしているに違いない

「別にいいけど、兄さんは?」

「その前にお前の仲間を見つけないとな」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6308c/>

---

守護する者

2010年12月19日05時41分発行